

## 【コラム】

### 「河野博文さんをしのんで」

機械振興協会経済研究所 所長 林 良造

11月7日に河野博文さんの訃報が突然飛び込んできました。通産省の一期先輩で、資源エネルギー庁長官、石油金属開発機構理事長を務められ、その後、日本セーリング連盟の会長としてまた日本オリンピック委員会副会長など幅広く活躍された。こう書くと機械振興協会とは関係なさそうに見えるが、河野さんは1970年代から90年代にかけ、通商産業省機械情報産業局において、電子機器電機課総括班長、総務課法令審査委員、知的財産権室長、産業機械課長、総務課長、次長を務め、情熱をもって機械産業を愛し、その振興の礎を築いた恩人の一人でもあった。現在でも官民間問わずファンは多い。

私は1年の差で河野さんの後任になることも多く、また仕事でのかかわりも大変深かった。特に、機械情報産業局の補佐時代には私は機械振興基金の生きた使い方を教わり、その後、日米通商摩擦の燃え盛る80年代半ばに、N.Y.の産業調査員として半導体交渉のバックチャネルの役割を担い、共に働いた3年間は密度の濃いものであった。天性のずぼらな私と野性的に見えるながら目と心の行き届いた河野さんはまれにみる良いコンビであったそうである。当初私はプラザ合意や日米武器技術供与の問題に専心していたが、半導体問題は次第に火が大きくなり、最終的には交渉を途中で引き継ぐ形になったことなど尽きぬ思い出があふれ出てくる。経済研究所の今回の(2022年度～)半導体研究プロジェクトでもその証言に期待するところも多かった。さらに90年代には、自民党の下野などからくる政治との軋轢、メディアの霞が関バッシングなどの中で、通産省が大きく揺れた時、機械産業局総務課長、官房総務課長、石油部長、機械情報産業局次長と連続して4つのポストを河野さんから引き継ぎ、それらも通常より長い期間務めることになった。

また、2019～2021年度に経済研究所の研究プロジェクトの一つとした湾岸危機でも、私が国際資源課長としてエネルギー面での責任者であった時期に、河野さんは米州大洋州課長として外務省の岡本行夫 北米一課長とともに日米関係を支えられており、折々にその息遣いを感じることもあった。さらにその後の石油産業政策についても私の石油部長の前任者でもあった。

このようにかかわりが深く、家内や子供たちは河野さんの大ファンであり、また河野夫人与私は大変馬が合うなど家族ぐるみで仲の良かった関係であったが、その政策の方向、通産省の中の立ち位置ではかなり趣を異にする関係でもあった。ただ、常にそのまっすぐで私心のない姿勢は揺らぐことはなく、お互いにその点で深く共鳴するところが底辺にあったと思っている。

昨年久しぶりに家内共々電話で長く話す機会があり、コロナが終息すればぜひ一度夫婦でゆっくり食事でもというやり取りをした。その後体調がすぐれない様子を側聞することはあったものの、まさかあの人がと思っているうちにこのようなことになってしまった。知らせの翌日、河野さんの若かりし頃の心象風景を感じたくなり旧医学部一号館に移った私の研究室に立ち寄り、抜けるような青空の下、本郷界限を歩いてみた。大学が異なっていたため正確な姿は思い描けないものの、同じ時代に学園紛争にかかわったものとして胸に迫るものを感じた。ある人が、「人生というお祭りが終わっていくようなさみしさ」と表現したが、まさに万感胸に詰まるところがある。ご冥福をお祈りしたい。

(了)